



# 工高タイムス

北海道旭川工業  
高等学校新聞局  
〒078-8804  
北海道旭川市緑が丘  
東4条1丁目1-1  
発行人(局長)  
村岡 良祐  
(工業化学科3年)

## 新聞全国

### 香川で交流新聞を制作

### 紙面審査賞で優良賞に

新聞局は7月28〜30日に香川県善通寺市の四国学院大学と善通寺市民会館で行なわれた第49回全国高等学校総合文化祭香川大会新聞部門に参加した。全国から129校、430人が集まった。大会テーマは「讃岐に咲くは才の花たち」。杉野将寛君(化3)と稲留駿斗君(電2)が取材した内容を紹介する。

大会初日は16時から交流会をし、香川県の文化と歴史、自然に関するクイズを取り入れたすごろくで交流を深めた。16時50分から自校新聞の交換と班別編集会議を行なった。5、6人で一つの班を作り、新聞のレイアウトや役割分担、

取材内容を話し合った。

2日目は開会式と全国高校生新聞年間紙面審査賞の表彰式が行われ、旭工は優良賞を受賞した。次に滋賀県立虎姫高校の鈴木真由美先生の「交流新聞作成と取材活動のポイント」についての講話を聞いた。

10時40分から編集会議をし、11時40分〜16時20分に48班が11コースに分かれて取材をした。取材後、四国学院大学へ戻り新聞制作に取り掛かった。18時まで記事を書いた。

3日目は11時までに新聞を完成させ、午後からは生徒活動発表を聞いた後、石川県立金沢泉丘高校の谷口豊先生から交流新聞の講評を受けた。閉会式後、研修取材として四国水族館へ行き、副館長の鈴木規泰さんから水族館の魅力聞き、館内を見学した。

## 丸亀城

### 現存12天守の一城

### 水害から石垣を復元中

Gコースは丸亀城と丸亀うちわミュージアムを取材した。明治時代に日本の城は9割



重要文化財の丸亀城天守閣

以上が取り壊されたが、丸亀城は400年以上前に建てられた天守閣と大手門が現存し、国の重要文化財に指定されている。江戸時代以前に建てられた天守閣で現存しているのは12城だけだ。

丸亀城の石垣は総高60mで日本一。曲線の美しさとともに「石垣の名城」と言われる。しかし、平成30年の西日本豪雨によって高さ31mの石垣の一部が崩れ落ち、今も修復作

## 丸亀うちわミュージアム

### 一本の竹がうちわに

### 生徒が最終工程を体験

丸亀うちわミュージアムでは、うちわの製作体験をし、うちわ職人に取材をした。丸亀うちわは江戸時代から作ら

### 一本の竹がうちわに

### 生徒が最終工程を体験

業が続けられている。石垣は土盛りで土台を作り、滑り止めの小石を間に入れて築石を置いていく。崩れ落ちた約9900個の中から元の築石を探し出し、ぴったり合うようにミリ単位で調整していくため、1日に置けるのは2、3

石だという。修復作業を担当している丸亀市教育委員会教育部文化財保存活用課主査の真鍋一先生は「江戸時代の人々が石垣に込めた思いを、後世の人が理解できるように元通りに戻したい」と語った。

## 江本手袋

### 世界に一つだけの手袋

### 「はく」香川から北海道へ

江本手袋は東かがわ市で「佩(はく)」というブランドで国産のウール100%の手袋を手作りで製造している。オーダーメイドの手袋も作っており、自分の手にピッタリな世界に一つだけの手袋を手に入れることができる。



縫い付けを教える久米さん(右)

時代は外国から来た文化だ。日本は手甲と呼ばれる腕を覆うものが主流で事故防止のための装備だった。手袋と一緒に靴も入ってきたので、最初に靴も入ってきたので、最初

## 醤油蔵かめびし屋

### 伝統の「むしろ麹製法」

### おいしさと安全にこだわる

かめびし屋の醤油は日本で唯一伝統の「むしろ麹製法」で作っている。ワラやいぐさを編んだむしろに麹を寝かせて成長させる。麹を仕込む3日間2時間に一度温度調節を行なうため、社員の廣瀬和也さんは「室内は暑いので汗で2kgやせたこともある」という。麹作りはほぼ手作業で職人が時間と愛情をこめている。麹の主原料の大豆と小麦は100%国産。無添加なら

ではのおいしさと食の安全にこだわっている。麹に塩水を加えたものを1年半〜20年、杉桶で熟成させて醤油ができる。20年物の「古醤油甘蔵造」は濃厚でとろみがある。

「貼り」の作業を体験した。「貼り」ではうちわの種類によってのりの濃度を調整し、うちわの竹が広がっている部分の「穂」にはけを使ってのりを手前から奥へ力を入れて貼りに塗り、地紙を「穂」に貼り付ける。「たたき」はうちわの外形をした「たたき鎌」を「穂」と地紙に当てて木づちでたたき、切り取ってうちわ

の形にする。最後の「へり取り」はうちわの「穂」の部分の周囲にへり紙と呼ばれる細長い紙を貼り、さらに「みみ」や「ぎぼし」を貼って、うちわが完成する。

うちわ職人の河野竹克さんに「割き」の作業を見せてもらった。切込機という道具を使って、竹の上側からうちわの手で持つ部分約10cmを残して切り込みを入れて裂く、「穂」の数は35〜45本になる。

河野さんは「うちわは日本文化のため、外国ではあおぐことに使われずに放置されるか、飾られるかになってしまっているのが残念」と語った。



「割き」をする河野竹克さん



## 工具箱

新聞局の3年生と2年生は7月28〜30日に香川県で行なわれた全国高等学校総合文化祭新聞部門に参加した。大会では班ごとに色々な場所へ取材に行き、B4サイズの手書き新聞を制作した。大会1日目は班のメンバーで新聞交換と編集会議を行なった。他校の新聞はSNS紹介や意見募集にQRコードを掲載していたり、四コマ漫画や連載小説を載せており、工高タイムスにないものがたくさんあり参考になった。編集会議では私の班が取材する江本手袋について話し合い、手袋を「はく」という言い方が通じなかったことから北海道弁と香川弁の共通点をコラムに入れるなど、常に記事のネタを探している姿勢を見て全国のレベルは高いと実感した。2日目、3日目は班のメンバーで交流新聞を作成、講評をもらった。私たちの班はレイアウトにインパクトがあるとほめられてうれしかった。大会に行きうどんを6杯食べた。私は麺好きで必死に食べ回った。うどんの本場、香川県は麺が太く、コシが強かった。食べ応えは十分あったが代わりにあごがとんでも疲れた。麺だけではなく薬味のネギもおいしかった。これがうどんの味を引き立てる秘訣だと感じた。道民としては道産ネギの方がよいと考え、うどんを自宅で作った。おいしかった。メンバーに恵まれたの取材や新聞制作は大きな経験になった。応援していただいた皆さん、ありがとうございました。(電2稲留)

### 四国水族館

# 飼育に熱意と愛情を注ぐ

## 四国の海と川の生き物を満喫

四国水族館は「生き物にとっ  
てストレスの負担が少なく、  
居心地がよい水族館」を目標  
としている。館内の空間づくり



四国最大の650m³の水槽で太平洋エリアの魚を展示

に工夫を凝らし、飼育に熱意  
と愛情をもって取り組んでい  
る。また、最新の双方向コミュ

ニケーションツールのほか、  
時間や季節によって変化する  
空間演出を取り入れ、訪れる  
たびに異なる展示・空間・コ  
ミュニケーションを楽しむこ  
とができる。

館内は四国の周りの海と清  
流の生き物をメインに展示さ  
れ、太平洋エリア、清流・湖  
群エリア、瀬戸内海エリアな  
どに分かれており、企画展示  
も行なわれている。太平洋エ  
リアの綿津見ホールでは四国

最大の650立方メートルの  
水槽を使って展示され、太平  
洋を回遊するカツオやエイが  
泳いでいる。清流・湖群エリ  
アでは四国を流れる仁淀川や  
四万十川、吉野川などの奇麗  
な水でしか生きられないオイ  
カワやモツゴを展示している。  
瀬戸内海エリアでは、世界最

大の鳴門の渦潮を再現し、マ  
ダイやブリの泳ぎを見られる。  
イルカのプールは1階では水  
飼育員が手書きした解説黒板

中のイルカの動きがよく見え  
屋上では手が届きそうなほど  
近くでプールの上をジャンプ  
するイルカを見られる。また、  
時間帯によってはペンギンや  
カワウソなどのエサやりを見  
ることもできる。各水槽の横  
には飼育員が手書きした解説  
黒板が置かれている。

### 取材を終えて

四国水族館ではとても生き  
物に対する思いが伝わった。  
瀬戸内海へのこだわりも強く、  
渦潮の再現もとても凝って  
て素晴らしいと思った。飼育員  
の手書きした展示案内板は分  
りやすく、魚を見分けて楽し  
むことができた。香川県はう  
どんだけではなく、素晴らしい  
水族館がある。(化子 杉野)

四国水族館を取材して他と  
いかに差別化しようと工夫し  
ているのか分かった。展示物  
の生態について書かれた表示  
が、四国水族館では飼育員の  
手作り、黒板に生き物のア  
トが書かれ、理解しやすいも  
のだった。売店にあるイルカ  
のイラストのオリジナルTシャ  
ツも買った。(電2 稲留)

### 集戦 80年③

## シベリアで抑留生活 食事をピンハネされる

(第524号からの続き)

11月3日貨車は満州里からソ満  
国境を越えた。それでもまだダモ  
イ(帰国)を信じていた。が、貨  
車は西に走りその夢を潰した。ハ  
ラグンという小さな駅に着いた。  
ソ連は武装解除後、朝鮮兵や将校  
を別にし、さらに各部隊を混成し  
て新たな作業大隊(千五百人)を  
編成、少数の将校をつけた。私は  
本隊からさらに分かれた分遣隊  
(五百人)に入った。

どこでも嫌われた。食事を運ぶの  
は初年兵だが分配は上等兵の仕事  
になった。極端な食事の差別が全  
員注目の中で平然と行なわれた。  
パンは初年兵に一回り小さく切ら  
れ、汁の実は申し訳程度にしか入  
れてくれなかった。そのくせ使役  
は何でも初年兵であった。

栄養失調は凍土に転ぶとかすり  
傷がすぐ化膿した。入浴と縁が切  
れた。「着たきり雀」にはシラミ  
が無数にたかかった。栄養失調にシ  
ベリアの寒さ、ひどい食事に過  
酷なノルマは、戦闘以来の過労の  
蓄積と相まって倒れるのが当り前  
の毎日であった。 戦闘中こそ

「国のため」共に戦うという大義  
名分に支えられて、乏しい物も公  
平に食べたが今は違った。「自分  
のため」少しでも多く部下の食事  
を削った。階級がものをいいた。  
オリの中で食事をピンハネされた  
あげく私兵のようにこき使われ、  
身も心もボロボロになっていった。  
もう誰も信じられなかった。

どこかの班で寝ている間に朝食  
のパンがそっくり盗まれた。それ  
からは朝食のパンは夕食後各自に  
分配するようになった。今度はそ  
れが盗まれた。仕方がないから朝  
食用のパンも、夕食後配られると  
すぐ腹の中に入れてしまうように  
なった。汁だけの朝食で作業に出  
た。飯ごうを盗まれた。空腹を満  
たすお湯も沸かせない。パンを食  
べずに残り、誰かが盗んできた飯  
ごうと交換した。抑留生活ではパ  
ンは貨幣の代用をした。そして盗  
まれるのはいつも弱兵であった。

伐採をした丸太をトラックに積  
み上げる作業が終わるとその上に  
乗って帰った。平原のように広が  
る凍土を時速80kmで走る。丸太の  
上にしがみついている手は寒さに  
しびれた。必死につかまっていた。風  
が顔から頭がい骨を通って後ろへ  
「ビュー」と抜けていくのが分か  
る。涙が落ちた。戦争が終わって  
いるのに、こんなところでこんな  
ことをしなければならぬ運命を  
呪った。

### 階級がものをいう

中隊長(大尉)は兵隊ならゆう  
に十人も寝ているような場所を独  
占していた。兵隊はエビのように  
体を曲げ重なり合って寝る場所し  
かなかつた。手足を伸ばすと蹴飛  
ばされた。夜中トイレに行くと帰  
る目をつけたのも当然である。  
中隊長が帰ってきた。「この兵  
隊は何の特技があって中隊本部へ  
きたのか」と指揮班長に聞いた。  
訳を聞いた中隊長は「ここは病室  
じゃない。どこでもいい、すぐ追  
き先が決まらず一晩大尉の横に寝  
た。もういつ墓標になってもいい  
ような体であった。私は満ごうの  
恨みを込めて上着のシラミを大尉  
の背にはわせた。

(次号へ続く)